No.1グローカル大学宣言 小樽商科大学の挑戦

自由な学風と実学・語学で グローバルな人材育成を

小樽商科大学の同窓会である「公益社団法人緑丘会」は、大学と密接な連携の下にさまざまな支援を行っています。
島崎憲明緑丘会理事長に、「緑丘会」の今後の取り組みについて、
また小樽商科大学の将来のビジョンや北海道に求められる人材について、和田健夫学長を交え、語っていただきました。

小樽商科大学 学長 **和田 健夫**

キャンパス内から見おろす小樽市街と石狩湾

軸足は地域に。視点は世界に。
商大はグローカル大学。

公益社団法人緑丘会 理事長 **島崎 憲明**

1969年小樽商科大学商学部卒業。同年住友商事株式会社入社、米国住友商事などを経て2005年から09年まで代表取締役副社長、13年まで特別顧問。09年から13年までIFRS財団トラスティ。これまでに日本経団連で資本市場部会長、企業会計部会長を、金融庁で企業会計審議会委員、金融審議会委員・会長代理を、経済産業省で高度金融人材産学協議会議長を務める。現在は金融庁政策評価有識者会議委員、日本証券業協会副会長自主規制会議議長、日本公認会計士協会顧問、関西大学会計専門職大学院客員教授、企業の社外取締役、経営アドバイザーなどを務める。

同窓会との強い絆を学生の未来のために

和田　私は本学が誇るべきもののひとつとして同窓会組織・緑丘会との強い絆が挙げられると思っています。現在他の大学から本学の同窓会は「大学の理想型」だという賞賛をいただいていますが、島崎さんは昨年6月に緑丘会理事長に就任され、この半年間どのような方針で活動をされてきましたか。

島崎　小樽商科大学は、伝統的に同窓会との結びつきが強いと感じております。創立100余年、北海道において国立大学唯一の社会科学系の単科大学としてその存在を示してきましたが、総合大学にはない、垣根の低い密なつながりがあり、それは在学生や教職員との関係のみならず、卒業後の関係においても長く続いています。

緑丘会は、同窓生の相互の親睦や人脈、情報ネットワークの拡充はもとより、学生への教育支援、就職支援など、人材の健全な育成に努めております。現在、企業等の第一線で活躍されている本学の卒業生が、豊かな知識や経験を基に講義を行う連続講座である「エバーグリーン講座（総合科目Ⅲ）」を開講しておりますが、この〝貴重な実績に基づいた知識の伝授〟をさらに有意義に活用できないかと考えております。例えば、実務経験に基づく国際的な事業経営・ビジネス論をテーマとした講義を英語のみによるものも含めシリーズで行い、講師からの説明の後、質疑応答の時間を十分にとって学生たちと自由闊達（かったつ）な意見交流を行うなど、国際舞台で活躍し、各産業分野にわたって高い専門性と知見をもつ同窓生が多数在籍している緑丘会ならではの新しい支援ができると考えております。

和田　本学のOB・OGには、日本を代表するグローバル企業の重鎮や、起業家として活躍されている方が多くいらっしゃいます。本学の伝統である「実学」「語学」「品格」を具現化された先輩たちの講義は、今の学生にとって価値あるメッセージになると思います。緑丘会には、毎年約2500万円に上る財政支援やキャリアアドバイザーの雇用などの人的支援をいただいております。OB・OGからもさまざまな形でご支援いただき、そのひとつとして、元日本オラクル会長の佐野力氏からのご寄付により、返還義務のない給付型奨励金「佐野力海外留学奨励金」を創設していただきました。あらためて緑丘会、およびOB・OGの強い絆を感じます。

ところで島崎さんは本学の学生として当時どのように過ごされたのでしょうか。印象深い思い出などはございますか。

小さな地方大学だからできる強みがある

島崎　学生時代、私は寮で過ごしました。小樽の冬は晴れた日より雪の日が多く、いつもどんよりとした天気が続きます。そんな日には決まって寮生同士、さまざまな議論を交わしあったものです。そして学生間の絆が深まり、その議論のテーマとなった講義から、先生との絆が生まれました。

今から思うと、若い日の議論が生涯の友を生み、同窓会の絆になっていったのだと思います。寮の部屋から見た海が、どんよりと雪にかすむ様子は今でもはっきり思い出されます。

小樽は、まちの規模や気候を含め、学生として必要な素養を身に付ける、非常にいい環境なのではないかと思います。そう、イギリスのエジンバラとよく似ています。

和田　確かに小樽はそんな気持ちにさせるまちだと思います。「絆」が生まれるのも「小さな地方大学」の強みですね。

島崎　「北に一星あり、小なれどその輝光強し」という一節は、代々学生から伝わってきたと聞いておりますが、まさしく「北のウォール街」と言われた小樽のまちと商大生の強い気骨から生まれた言葉であると思います。小樽商科大学出身者は、東京や京阪神などのいわゆる「都会の大学」出身者には「絶対に負けないぞ」といった思いがあると感じます。入社当時から謙虚に、いちずに働き、素直に先輩の話に耳を傾けることができる。すると4～5年後には歴然とした差となって表れる。そんな姿を私は何度も見てきました。「強い絆を持つ小さな地方大学」がつくり上げる気骨ある人間像は、小樽ならではのものです。

新たな可能性に挑む楽しさを伝えたい

和田　島崎さんは北海道の出身でいらっしゃいますが、北海道の魅力や可能性についてどのようにお考えですか。

島崎　北海道に帰ってくると必ず感じるのが、美しい自然、おいしい食べ物です。魅力あふれる観光資源が、新しいビジネスとして全世界へ広がっていく可能性は大いにあります。高温多湿の環境で暮らす東南アジアの人たちは、この地の秋から冬、春の彩りに感動し、インバウンド観光の推進につながっています。ホテルやレストランが潤い、そしてまち全体が活性化していく。北海道における国際感覚はますます必要になってきます。農水産物においては良質な道産品を全国へ、海外へ送り出す新しい発想を持った企業が必要となります。

小樽商科大学は、そんな北海道の可能性に応えていける「ベンチャーを育てる大学」であってほしいと思います。今は大企業、一流企業だけが将来への開かれた道ではありません。小さな企業を大きくしよう、新しく企業を立ち上げよう、といったチャレンジする精神が求められています。そしてその道内企業が全国へ進出し、また上場企業となった暁にはもう一度「事業経営」について、小樽商科大学で学び直す、そして学生にその経験を伝える、そんな好循環が実現できれば素晴らしいと思いますね。

和田　本学には起業家を輩出し、育てるというノウハウがあります。現に、観光庁からの委託事業「産学連携による旅館・ホテル経営人材育成に関する業務」や経済産業省の補助金「産学連携サービス経営人材育成事業」にも採択されています。教育面の実績としては、近年全学的に取り組んできた多様なアクティブラーニングが先進的な事例として評価されました。「地域連携キャリア開発」が、日本インターンシップ学会2015年度槇本記念賞において「秀逸なるインターンシップ」として表彰されました。また、「総合科目Ⅱ（大学の学びと社会）」が、第12回日本e-learning大賞「アクティブラーニング部門賞」を受賞しました。

島崎さんは「北海道における国際化」のお話をされましたが、本学では2013年8月に「No.1グローカル大学宣言」を行いました。〝グローバル〟〝地球規模〟な視野をもって、ローカルに〝地域の視点から〟考え世界で行動できる能力の育成」です。島崎さんは、住友商事という日本を代表するグローバル企業のけん引者として長くご活躍されてこられましたが、グローバル人材の輩出にあたりどのような取り組みが必要とお考えでしょうか。

タブレットPCや3壁面スクリーンなどのICT機器を活用するアクティブラーニング。

小樽から生まれるグローバルな人材

島崎　グローバル人材に不可欠な要素として学生時代に身に付けてもらいたいことは、「コミュニケーション能力」と「リーダーシップ」「問題発見・解決能力」、さらに加えるなら「スポーツや文化などでの〝これは〟という経験」だと思います。これらを養うには、幅広い教養と語学力といった「リベラルアーツ教育」が必要です。

私は学生時代、講義やゼミ、応援団、バスケットボール部を通じて多くの経験をしました。応援団員が足りず廃部寸前に追い込まれたとき、当時19歳の私は「どうしたら組織を維持し強くすることができるのか」を真剣に考え、仲間と議論し、とことん追求したことを覚えています。それが会社組織においても同様のことがいえる事実を、社会に出て知りました。また、入学してすぐにサミュエルソンの原書講読「経済学概論」を受講しましたが、このレベルが本当に高く、厳しく、その講義を乗り切った思いは今でも忘れません。大学の講義とはこういうものなのか、という洗礼を受けた強烈な思い出ですね。

小樽商科大学は、昔から幅広い教養と実学・語学を重視し、ゼミにおいては自由度の高い取り組みを行い、またクラブの加入率は全国トップクラスと聞きます。学問を中心に人間形成全般において、多様な体験と広い視野を養える大学であると思います。小樽のまちと一体化した大学。小さなまちだからこそ、小さな大学だからこそ、グローバル人材に必要な能力をあらゆる側面から体得できるのだと感じます。

和田　本学では「実学」「ゼミ」を通じてコミュニケーション能力や問題発見能力を伸ばしています。地域や企業と連携し、与えられた「課題」を学生自身が「解決」することで、社会的対応力を向上させる実践的な授業「PBL～Project-Based Learning 課題解決型学習」を積極的に取り入れています。このような能動的学習「アクティブラーニング」については本学は全国のフロントランナーだと自負しています。「実践から学ぶ」ことは本学の伝統、DNAのようなものです。また経済やビジネス、マーケティングの深い専門知識と同時に、人文社会科学、自然科学、語学といった幅広い分野の知識を総合的に教育するのが本学の特色です。100年以上にわたり本学が求めてきたのは、高い見識と教養をあわせ持ち、社会のリーダーになるにふさわしい「品格」を備えた人材の育成です。

島崎　小樽の海は世界につながっています。このまちから北海道はもとより、全国、世界の各地で活躍する人材が一人でも多く巣立ってほしいと願っています。そのために緑丘会はさらなる組織の強化と支援を進めてまいります。

広大な敷地には講義棟、図書館や、国際交流会館、合宿研修施設、学生寮なども。

いよいよ出願が始まります！

平成28年度学部入学試験日程
（前期日程・後期日程のみ）

■入試区分・募集人員
昼間コース一般入試（前期日程）・280人　昼間コース一般入試（後期日程）・90人
昼間コース専門学科・総合学科卒業生入試（前期日程）・5人
夜間主コース一般入試（前期日程）・20人

■出願期間
平成28年1月25日（月）～2月3日（水）

詳細に関してはホームページをご覧ください。
担当窓口／小樽商科大学教務課入試室　TEL 0134-27-5254

私たちは,学生の国際交流や就職活動等において
母校を支援しています。

小樽商科大学同窓会

公益社団法人 緑丘会
公益財団法人 小樽商科大学後援会

〒170-6057 東京都豊島区東池袋3丁目1番1号 サンシャイン60ビル 57階
TEL 03-3981-2340　FAX 03-5396-4011
ホームページアドレス http://www.ryokyu-web.net/　メールアドレス ryokkyukai@axel.ocn.ne.jp

グローカル教育の推進を目的とした、新たな
給付型の海外留学奨励金制度を創設！

佐野力（さのちから）海外留学奨励金

昭和38年卒、元日本オラクル会長佐野力氏の寄付による留学支援制度です。

入学後の1・2年生を対象に、毎年60人、10年間で600人の留学支援を行います。当奨励金は給付金で将来の返却の必要はありません。

詳細に関してはホームページ、または担当窓口へ直接お問い合わせください。
担当窓口／小樽商科大学学生支援課国際交流室　TEL 0134-27-5263

otaru-uc.ac.jp

国立大学法人 小樽商科大学